

ふじのくに芸術祭2025（第65回静岡県芸術祭）文芸コンクール静岡県芸術祭賞 受賞作品

【転載禁止】

作・大澤音海

# 「静岡・六月十九日の火 — 記憶の扉 —」

VER. 3.71 公開用

（連絡先：〒420-0871 静岡県静岡市葵区昭府1丁目10番37号 劇団静芸Studio気付 大澤音海）

「たどりつきたい未来があるから——私たちは戦争を語り継ぐ。」

昭和二十年六月十九日、静岡大空襲。銭湯「花の湯」の家族が、焼け跡のなかで喪失と再生に向き合う姿を描く。記憶を語り継ぐことの意味と、「生きる」ことの重さを静かに問いかける物語。

2025年8月 大澤音海（劇団静芸 座付き作家）

「静岡・六月十九日の火 ―記憶の扉―」（約1時間30分程度を想定）

1 記憶の扉―花の湯の前で

現代

昼過ぎ

2 湯気の間―家族の暮らし

一九四五年六月十七日

午後5時近く

3 約束と焦り―少年のまなざし

一九四五年六月十八日

午後6時ごろ

4 静けさの予兆―六月十九日

一九四五年六月十九日

午後7時前

5 空が落ちた夜―静岡大空襲

一九四五年六月十九日

午後11時半過ぎ

6 炎の町を走る―残す者、託す者

一九四五年六月十九日

深夜12時前後

7 燃え跡に立つ―夜明けの誓い

一九四五年六月二十日

早朝4時半過ぎ

8 風と灯―あの夜を越えて

現代

夕方

基本的に休憩なしで上演可能作品。

休憩をはさむ場合は5場↓6場の間。前半55分程度、休憩10分のち、後半30分前後を想定。

【登場人物】

- 1 伊藤信也（15歳） .. 勤労働員で住友金属工業静岡プロペラ工場にて働く少年。  
【兼役】 祐樹（高校生・17歳） .. 真面目だが堅すぎず、気遣いもある。
- 2 鈴木千代（17歳） .. 銭湯「花の湯」の娘。信也とは幼いころから姉弟ような関係。  
【兼役】 沙羅（高校生・17歳） .. 地元静岡出身。
- 3 伊藤 濤（11歳） .. 信也の妹。  
【兼役】 ひかり（高校生・16歳） .. 歴史には関心が薄い、人懐こいタイプ。
- 4 伊藤文江（35歳） .. 信也と濤の母。たきとは幼なじみで、姉のように慕う。
- 5 鈴木たき（38歳） .. 千代の母。「花の湯」を営む。文江と幼なじみで妹のように接す。
- 6 信也おじいさん（90歳代） .. 伊藤信也。「花の湯」のおじいさん。

※ 年齢設定については指針であるため、こだわりすぎることはない。

【要約】

「静岡・六月十九日の火——記憶の扉——」（作…大澤音海）

昭和二十年六月十九日。静岡の街は静かな夕暮れに包まれていた。

駒形の小さな銭湯「花の湯」では、家族がささやかな日常を繰り返していたが、深夜、激しい空襲によってその日常は一瞬で焼き尽くされる。

空襲の夜を越えて迎えた朝、その空気と記憶は今を生きる私たちに問いかけます。

——「忘れないこと」が命をつなぐことなのだ。

戦後80年を迎える今、過去を『語る』ことの意味を、世代を超えて静岡の地に刻む物語です。

# 1 記憶の扉―花の湯の前で

舞台には、古びた銭湯「花の湯」。

店舗入口には白い暖簾のれんがかかっている。

入口そばには、腰掛け。

背景には、電柱と戦後に建て替えられた町並みの看板がぼんやり見える。

店先から覗く棚には、木札が飾られているのが少しだけ見える。

暖簾をめくると見える「女湯」と書かれた木札には、焼け焦げた跡が残る。

木札のそばには、「花の湯 記録帳」と記されたノートも飾られている。

初夏の昼過ぎ。ラフな私服の高校生3人が舞台上手から現れる。

祐樹

……ここだ。「花の湯」って暖簾に書いてある。

ひかり

わ、めっちゃレトロな銭湯！……今もやってるんだ。沙羅は、入ったことあんの？ 家近いん

でしょ。

沙羅

ううん。おばあちゃんに聞いたら、昔からずっとあるらしいよ。普通の銭湯と思ってたけど……

…。ロコミに「空襲をくぐり抜けた、古い木札の話が聞けた」って書いてあつてさ、気になつて。

祐樹

……どんな話なんだろ。戦争の話なんて授業以外で聞いたことなんてないしさ？

ひかり

うちの先生が言ってたよ。『静岡って、東京より火の海だったんだぞ』って。資料もくれたけど

……なんか実感わかなくてさ。

沙羅

本当に知らなかったなあ。静岡でそんな大きな空襲があったなんて、全然ピンとこないよね、

ひかりと一緒。

祐樹  
てか、俺らが探究活動のレポートで「昭和のまち歩き」ってテーマ選ぶの、ちよつと渋すぎたか  
もな。

ひかり  
でも、ほかの班がデパート調査とかやってる中で、こっちは銭湯だよ？ めっちゃ味あるって。  
しかも……「銭湯で戦闘」っていうことでしょ？ へんな感じ。

祐樹  
うわ、出た。シャワーの代わりに火の玉が降ってきたとか、シャレになんねえよ。  
ひかり  
湯気じゃなくて、ほんとの煙でモクモクだったかもね……。

少し間。

沙羅  
……あ、やば。冗談のつもりだったけど、ちよつと背筋、ゾツとした。  
祐樹  
うん。ここで、ほんとに……そんなことがあったんだ。

ふと、沙羅が入口の中に飾られている木札に気づき、暖簾をめくって中を覗く。

沙羅

ねえ……あれ、なに？ 「女湯」って……すこし焦げてる……。

ひかり

見て見て、あれ「女湯」木札だよ！ 昔のやつ感すごくない？ 祐樹も、ちょっと、覗いてみ。

祐樹

あれか？ よこにあるノートには「花の湯記録帳」って書いてある。見てもいいのかな……。

下手から信也おじいさんと千代おばあさんが、ゆつたりと落ち着いた足取りで登場する。

信也おじいさん

ああ……いらつしやい。珍しいね、高校生が3人も。

千代おばあさん

お電話ありがとうね。暑かったでしょう。こんな蒸し暑い中……よく来てくれたねえ。

3人、慌てて軽くお辞儀をする。

祐樹

あ、こんにちは。ぼくら、学校の課題で……昭和の歴史とかを調べて……。

ひかり

この「花の湯」が、空襲で燃えて……また再建されたって知って。

沙羅

あの……直接、お話が聞けたら……思ってた来ました。

千代おばあさん

そうやって聞いてくれる人がいるだけで、うちらはうれしいのよ。ねえ、おじいさん。

信也おじいさん

(頷いて) そうだな、千代さん。この駒形こまがたも、新通しんとおりも、七間町しちけんちょうも、呉服町ごふくちょうも……ぜんぶ真っ

赤になった夜だった。

沙羅

……あの木札、焼けた跡があるんですけど……

信也おじいさん

それはね、戦争の火で燃えた跡なんだよ。全部焼けてしまったけえが、なぜか、その木札だけが

残ってた。「花の湯」が再建されたあとも、この銭湯の、昔の記憶を残したくて、大事にしてる

んだよ。そこにあるノートも、「花の湯」の記録なんだ。

千代おばあさん (微笑んで) これまでのこと、いろいろ書いてありますよ。

信也おじいさん 暑いから自宅の方で話そうか。おいで。

風鈴の音が少しだけ遠のき、明かりがゆつくりと落ちてく。

若者たちの姿が、二人に招かれて動き出す姿で影となり、下手に消えていく。

風の音と風の音が残り、溶暗していく。暗転。

(以降の場末ナレーション時には、暗転後に舞台転換)

信也の声 (ナレーション)

昭和二十年六月。空は晴れていて、町には変わらない日々があった。

春から学校は休みになり、子どもたちの姿もあまりない。

商店は、ほとんどが閉まっていた。

それでも「花の湯」には、人の気配があった。

静かな町のなか、暖簾が揺れ、かすかに、誰かの暮らしが動いていた。

あの日の空気には、どこか言葉にできない揺らぎがあったようにも思う。

声を失った町の中に、まだ語られていない記憶があった。

けれど、ちゃんと見た人がいて、それを聞いた人がいるなら

——忘れずにいることはできると思う。

ノートに、十五歳の僕は、こう書きはじめた。

「書くって、ちょっとこわい。でも、残しておかなきゃいけない。」

……語ることは、勇気であり、責任であり、希望である。

その声に耳を澄ませるとき、

過去はただの出来事ではなく、いまを生きる私たちへの問いとなる。

今も湯を沸かす、この小さな場所から

——静かに、ひとつの物語がはじまる。

風の音が、やがて消える。

## 2 湯気の向こうに―家族の暮らし

一九四五年六月十七日日曜日。午後五時近く。

強い日射しが縁側を照らし、仕事を終えて戻る人々の時間帯。

静岡市葵区駒形の銭湯「花の湯」。

舞台上手には、信也たちの家の縁側と勝手口が見える。

舞台下手には、銭湯「花の湯」の裏口。

舞台中央には、井戸端のような空間が広がり、

信也の家の縁側と銭湯の裏口との間を行き来できる裏庭がつながっている。

縁側には、薄曇りの柔らかな光が拡がり、風鈴が小さな音を立てている。

銭湯の裏口には、薪や廃材が積み、使い古された桶が並ぶ。

ポンプが舞台下手に設置されており、裏口の奥には釜場の気配も感じられる。

下手側。銭湯の裏口から千代が現れる。

煤けた手ぬぐいを絞りながら、手には洗い桶。

額には汗がにじみ、腰には防空頭巾を巻いている。

千代

……どうして、こんなにすぐ汚れるんだろう。昨日も掃除したばかりなのに。

桶を地面に置き、背伸びをする。

上手から信也が帰ってくる。肩に荷物。シャツに煤すすがついている。

信也

……ただいま。

千代

おかえり。今日も遅かったね。

信也

歯車が噛み合わなくてさ。主任、ずっと怒鳴ってた。

千代

また？

信也

終業の鐘、10分も延びた。暑くて、機械も職人もへばってる。

千代、洗い桶を手にして点検している。

千代

これ、中の木枠がゆるんでる。タガがはずれかかかってるよ。(はめ直そうとする)ダメだ。この

桶、薪にしちやおうかな。

信也

千代姉、ほんと働き者だな。

千代

姉ねえって言うな。姉弟じゃないんだから。

信也

でも年上だろ？

千代

だったら「千代さん」でいいの。

信也

……さん、って感じじゃないんだけどな。

ふたり、ふつと笑う。

たきの声

千代ー、もう開けるよー。釜の火、弱めすぎないでねー！

千代

分かってるー！

信也

薪、まだ足りてる？

千代

今日の分をたしても金曜までもたないだろうね。あとがないかも。店を5時からにしたのにさ。

信也

帰り道、解体中の家を見つけた。柱が乾いてた。明日、寄ってみるよ。

千代

(釜場に向かいながら) ……ありがとう。

濤が上手から駆けてくる。手にお椀を持っている

濤

にいちちゃん、帰ってた！

信也

濤。もう夕飯か？

濤

お母ちゃんが味噌、分けてもらったつて。今日は久しぶりに……味噌がある！

信也

それは事件だな。

濤

えへへっ！(と笑う) 大事件！

千代、ふと笑みを浮かべる。

文江が現れる。割烹着姿。笑みを浮かべている。

文江

ごはん炊けたよー。千代ちゃん、たきさんにも、おにぎり持っていくからね。

千代

いつも、ありがとうございます。でも、もう「花の湯」の開店時間…：終わったら、ありがたくいただきます。

文江

千代ちゃんの母さんと私は昔から姉妹みたいなもんだからね。昔から「花の湯」が大好きなのよ。いまは、どっちも父親たちが居ないんだから、お互い様。でもね、千代ちゃんがいなかったら「花の湯」はどうなってたことかねえ。ありがとうございます。

千代

やかましい母さんですけどね。ありがとうございます。

たきの声

なーに感謝し合ってるの。文ちゃん、こっちは廃材に足とられて転びかけたばあさんだよ！

場にやわらかな笑いがこぼれる。文江は家に戻る。

信也

……でも、「花の湯」って名前、いいよな。帰ってきた感じがする。

千代

それ、二人に言ったら泣かれそうだね。

遠くで汽笛のような音が鳴る。全員がふと耳を澄ますが、音はすぐに消える。何事もなかったように、また夕暮れの空気が戻る。やかんが沸く音。縁側に吊るされた風鈴が、かすかに涼やかな音を響かせる。照明がゆっくりと落ち、舞台全体が夕闇に包まれていく。

信也の声（ナレーション）

昭和二十年六月十八日。戦時中でも、この静岡の町では、いつも通りの日々が流れて

いた。母さんは、配給の米が手に入らないことを気にしていたけど、漬は、久しぶりの味噌汁が「旨かった」って、うれしそうに笑っていた。

——そんな「当たり前」が、ちゃんとそこにあった。戦争末期の静岡。町の銭湯は、今日も湯を沸かし、人々の体と心をあたためていた。

隣に住んでいて、子どもたちからずっと一緒に育ってきた千代さん。僕には、姉みたいな存在だった。元気なときおぼちゃん。がんばり屋の母さん。そして、よく笑う滯。

……そして、あの日は、ほんの少しだけ——風鈴の音が、やけに耳に残っていた。



### 3 約束と焦り―少年のまなざし

一九四五年六月十八日、午後6時ごろ。

西日が縁側を赤く染めている――。

舞台は駒形通の「花の湯」裏手、信也の家と銭湯の裏口が見える一角。

空は、すでに薄暗くなりはじめている。

その薄明かりの下、濡がひとりでしゃがみ込んでいる。

手には、竹の輪に手ぬぐいをくくりつけて作った「即席の魚捕り網」。

近くには、空のバケツが置かれている。

濤

(網を持ち上げて確かめながら) ……あの白いの、また見つかるかな。たきおばちゃんの手ぬぐい。ほつれてたけど、まだ使えるね。——魚、捕れたら……ごはん、少し増えるかもしれない。みんな、働いてるのに……わたし、なにもできてないから。

濤、網ですくう練習をはじめます。

裏口の戸が開き、煤けた作業着姿で信也が帰ってくる。学徒帽、薄手の作業着姿。顔と腕に煤がついている。肩から小さな荷を下げている。

信也

ただいま……。

濤

兄ちゃん！

信也

なんだそれ……まさか、安倍川、行ってきたのか？

瀧　ちがう。ひとりじゃ行っちゃ駄目だし。これ作って、まえ川で見たみたいに、すくう練習してた

だけ。でも、今度ほんとは行こう。また行きたいな、あそこ。あの白いやつ、覚えてる？流れの  
下のとこで、きらきらしてて……すごく速くて、きれいだった。

信也　……ああ、いたな。川底の石の影から、びゅつと出てくるやつ。

瀧　今度の休み、いっしょに行こうよ。ほんとに捕れたら……みんな、喜ぶと思う！

信也　（目を伏せて）……瀧。いまの仕事には、休みつて、ないんだ。

瀧　え、行けないの？

信也　（瀧の顔を見て）……でも、涼しくなったところ、休みの日ができたら、——その時は、絶対に一

緒に行こうな。

瀧　（ぱつと笑顔）うん、やくそくだよ！

信也、笑ってうなづく。瀧は家の中へ駆けていく。信也がしばしその背を見送る。

千代が出てきて、桶を手を持っている。

千代

おかえり、信也。今日も真つ黒だね。

信也

また火口の近くでやらされた。風抜けてねえから、暑くてたまんない。

千代

腕、まくつて。ちよつと。

千代が桶の水で手ぬぐいを絞って、信也の腕をふく。

信也

いいよ、自分でやる。

千代

そのうち煤が皮膚に染みて落ちなくなるよ。ほら、こことか。

信也

……今日、同じ班の戸塚が手をやけどしてさ。先生も来てないし、主任が怒鳴ってばっかで。

千代

そう……大丈夫なの、その子？

信也 水で冷やして、なんとか。……学徒動員なんて言っても、俺ら、兵隊の代わりだよ。

千代 お湯、もう沸いてるよ。

信也 ちょっとだけ、入ってくる。

千代 晩ごはん、できてたから早く出なね。さーて、わたしも番台を交代するかな。

信也と千代が銭湯の裏口に消える。しばらくして、たきと文江が裏口から現れる。

たき あの子、また今日もまっくらだったよ。

たき 煤の匂いで、帰ってきたのがわかるくらいだね。

文江 せめてお風呂だけでも、と思うからね。ありがたいよ。

たき でも、湯を沸かせるだけ、まだうちは恵まれてるよ、文ちゃん。

文江 ……ほんとに、そうだ。さ、ごはんにしようかね。

風呂場から信也の鼻歌がかすかに聞こえる。たきと文江、顔を見合わせて笑う。

たき

歌ってる……。

文江

あの子、小さいころから風呂が大好きでね。お湯に入ると元気になるの。

たき

お湯って、不思議だね。

たきと文江が、家に入っていく。

暗転。



## 4 静けさの予兆―六月十九日

一九四五年六月十九日、午後七時前。

日が沈みかけ、町全体が青みがかった静けさに包まれている。

空にはかすかな赤みが残り、地面はまだ熱を帯びている。

縁側には簾が下がり、風鈴がひとつ吊るされている。

風はなく、風鈴は微動だにせず、静かに止まっている。

水路からはカエルの声だけが小さく響く。

信也はシャツの上に浴衣を羽織り、団扇でゆつくりと扇ぎながら外を見ている。

そのそばに漣が座っている。

漣　　ねえ、あしたもお仕事？

信也　　うん。ふつうに行くよ。

漣　　学校、もうずつと行ってない……

信也　　関係ないよ。戦争中なんだから。

漣　　毎日、暑いし、やることもない……。

信也　　今日、工場の窓、開けさせてもらえなかった。

漣　　なんで？

信也　　敵機に見つかるってさ。暗幕の下で溶接していると、頭のなかまで汗かく気がする。

間。

濡は夕焼けを見上げる。

濡

なんか、今日の空、色がへん。

信也も見上げる。空は茜色に染まりはじめ、遠くの方に微かなゆらぎのようなものが漂っている。

信也

……風が変わったかもな。

千代が家の中から出てくる。手に、井戸水で冷やした麦茶の瓶。

千代

お茶、できてるよ。

澤 あ、千代姉ちゃんが入れてくれたの？

千代 うん。井戸で冷やしといた。(自分も一口飲んで) ……あれ、風、止まってるね。

信也 ……ほんとだ。

千代 空がさ。なんか、変。

信也 工場で聞いた。昨日、浜松のほう、だいぶやられたって。

千代 ……そう。昼に来た人も、そんな話してた。(瓶を信也に渡す)

少し間

千代 ねえ……前はさ、家にいると、よく笑ってたよね。

信也 え？

千代 小さいころ。風呂場で、桶ひっくり返して――

信也 (小さく笑って) ……覚えてない。

千代 嘘。おばちゃんと二人で、ずっと笑ってたじゃない。

澤 (ぼつりと) おかあちゃん、よく言ってた。面白かったって。

信也 ……ああ。笑いすぎて、湯舟に落ちた。

千代 (うなずいて) そうそう。

少し間

千代 ……今のあんた、あんまり笑わなくなった。

信也 ……まあ。働いてるから。

三人で黙って空を見つめる。

遠くで、子どもの笑い声が一瞬だけ聞こえ、すぐに消える。

表通りを、自転車が一台だけ通り過ぎていく。

信也

……風呂、湯がもつたないけど、今日はもう閉める？

千代

うん、もう誰も来ないと思う。今日も時間短くしたし。

信也

……あしたも、五時起きか。

千代

あの工場、どんなところ？

信也

とにかく、音。昼も夜も金属の音が止まらない。

千代

機械がいつぱい？

信也

でっかいハンマーの前に立たされて、プロペラ削るの。一日中。

千代

こわくない？

信也

……こわい。けど、誰かがやんなきゃ、つて思ってる。

千代

そっか。

信也

風呂、栓は抜く？

千代

……母さんが言ってた。今夜も湯は落とさないって。

漣

湯舟の水、なんでそのままにするの？

信也

火がきたとき、使えるからさ。

千代

前に空襲のあと、水がなくて困ったって、お客さんが話してた。

漣

……じゃあ、落とさないほうがいいんだね。

間。空を見つめる三人。

信也

あしたも暑そうだな。

千代が軽く笑う。

千代

もうすぐ夏だね。

いつのまにか、カエルの声も人の気配も止み、町全体が静まっている。

東の空の奥から、低く唸るような音が微かに聞こえてくる。

信也の声（ナレーション）

昭和二十年六月十九日、火曜日の夕方——風が止んで、空が黙った。

誰も言葉にはしなかったけど、みんな、何かを感じていたのかもしれない。

暑さのせいじゃない。……胸の奥が、ざわついていた。

昨日の浜松のことを、工場で聞いた。

けど、それがどれだけ近いか、僕らにはまだわからなかった。

ただ、カエルも鳴かない空気のなかで、麦茶の瓶の冷たさだけが、やけにくつきりしてたんだ。

夜が来る。

そう、すべてが変わる夜が——そこまで、来ていた。



## 5 空が落ちた夜―静岡大空襲

1945年6月19日、午後11時半過ぎ。

「花の湯」裏手。戸口、縁側、裏庭付近が照明に浮かぶ。

夜空に光が見える。

空襲警報の音。

ブーブーという断続音が遠くから響く。

千代

（銭湯裏戸から出てくる）さっき、警報が解除したばかりなのに……。また鳴ったよね。

たき

（同じく戸口から）鳴ったね。今度は、本物かもしれないよ。

文江

（続いて自宅縁側から）そのモンペのままでもいい。濡、手を離さないで。

信也 …… 駅のほう、真つ白。光だけが、すうつて落ちてくる…… 照明弾かも。

千代 (同じ方向を見る) …… 焼夷弾が降ってるね。

文江 …… 夜なのに…… 明るすぎる…… 昼間みたい……。 (空を見て) …… また、あつちは燃えてな

い。でも…… もう、時間の問題……。

たき 釜、焚き口はちゃんと閉めたよ。火は落としてあるけど、まだ湯が熱いからね……。

信也 湯舟に蓋した？

たき したよ。火の粉、落ちたら怖いからね。

千代 おばちゃん、荷物は？

文江 枕元に置いといた非常袋はこれ。信也、あとこれ。うちと千代ちゃん家の、大事なもの。

文江、信也に袋を渡す。信也は背負う。

信也 母さん、庭の防空壕は浅い。学校のほうに行こう。

千代 新通の？

信也 うん。少し遠いけど、ここよりはマシ。

滯 (夜空を見上げて) ……きれい。

千代 滯ちゃん……こつち。手は離さないでね。

滯 (見上げつつける) おまつり、みたい……。

信也 ……花火じゃない。逃げるよ。

遠方で轟音が鳴る。焼夷弾の「ザーツ」と空を裂くような音。照明弾で空が白くなる。

文江 たきさん、走ろう。

たき みんな、いくよ！

五人、照明弾の灯りを避けるように、家の裏手から奥へと駆け出してゆく。

照明と音響が、段階的に空襲の進行を描き出す。

市街地の方で、照明弾や焼夷弾の音が先に響き、まだ彼らの近くには落下していない。

遠くで爆音と焼夷弾の落下音が混じり始める。

ナレーションのバックで、焼夷弾の落下音が次第に近づいてくる。

暗闇の中、足元が赤く揺らめき、全員が走り出す。

信也の声（ナレーション）　　暗闇のなか、遠くが急に明るくなった。澤の手が、震えているのがわかった。

見上げれば、空から静かに光が落ちてくる。

澤は、それを見て「きれい」とつぶやいた。

でも、すぐに耳の奥で大きな音が弾けて、赤い火花が広がった。

逃げ道がどこかもわからないまま、ただ手を離さないようにして、夢中で走った。

振り返ると、家も町も、もう別の世界のものみたいだった。

声も出せず、息を詰めて、夜の中を駆け抜けた。

―あの夜、静岡の空が、真っ赤に染まった。

低空飛行するB29のエンジン音がやや近づく。低音がやや強まって焼夷弾の落下音がひとときわ高まる。

舞台下手で炎がゆらめく。

暗転。

## 6 炎の町を走る―残す者、託す者

1945年6月19日、深夜12時近く。

舞台には、新通国民学校に設けられた防空壕。

入口は狭く、周囲には避難してきた人々が殺到している。

内部は舞台外。入口付近に家族五人が駆け込んでくる。

空襲警報と断続するサイレン。照明弾の残光が舞台上をゆらゆらと照らす。

遠くで重い爆音。赤い閃光。

やがて、空気を切り裂くような焼夷弾の落下音が「ザーツ」と響き渡る。

文江

(息を切らして) まだ燃えてない、大丈夫……。信也、漣、千代ちゃんも、こつち！

家族が一斉に駆け寄る。壕の入口は人であふれている。人々のざわめき。

千代

(状況を確認して) いっぱい……。もう入れない……。

文江

(中に向かって) 子供を一人だけでも！ 漣を！

たき

(漣を抱き寄せ) この子だけ！ お願い、この子だけでも入れて！

漣、戸惑いながらも信也に背を押されて入口へ。

漣

(小さく) いや……。いやだ……。お母ちゃん。

文江 (震えながらも優しく) 漣、お願い。ここが安心なの。

信也 (小声、必死に) 漣、絶対だよ。絶対、むかえに来る。(低く) ……耳、目、ふさいで。

千代 (うなずき) 口で……深く、息をする。

漣、二人を見つめながら壕の中へ。入口がふさがれ、扉が閉まる。

——短い沈黙。たき、空を見上げる。

たき ……文ちゃん、花の湯のあたり……あかるくなってないかい？

文江 ……あれは、煙突だね。燃えてない？

千代 ……うそ。釜、火は落としてあるし、湯船には蓋もした……。

たき (きつぱりと) 私、戻る。湯舟の水がまだ使える。あの湯は、町の火を消す水だよ。

文江 ……たきさん、私も行くよ。できることをしなきゃ。

信也

(叫ぶ) お母ちゃん、だめだ！もう……もう行くな！

文江

(真つすぐ見つめ) 信也、お願い。濡を、そして千代ちゃんを……頼むよ。

たき

(明るい口調で) バケツリレー、隣組で仕切ってたんだよ。いつてくる！

たきと文江、上手に走り去る。

千代がその後を追いかけてようと一歩踏み出す。信也が手を握り止める。

信也

だめだ、千代姉……。濡が、濡が待ってる！ 近くの防空壕を探すんだ！

千代

(立ち止まり、震えながら) ……うん、わかってる。……でも……

間。

照明弾の光が再び空に広がり、焼夷弾が東から西へと徐々に落ち始める。

B29の轟音、爆裂音、燃え移る家屋の音、空気を裂く音。舞台全体に明るい炎の明りが満ちてくる。

舞台袖より、暗がりの中から断片的な声と音が聞こえ始める。

「ジジッ」と焦げる音。遠雷のような爆裂音。風の音。

たき（声のみ）　　桶、こっち！　底まですくって！

文江（声のみ）　　水、まだぬるいけど……やるしかない、撒くよ！

たき（声のみ）　　間に合うよ、次！　その桶、回して！

文江（声のみ）　　風が……煙、きつい……

たき（声のみ）　　止めるな！　ここでやめたら、全部、燃える！

文江（声のみ）　　……たきさん。

たき（声のみ）

まだ、やれる。文ちゃん、次！

爆裂音が高まり声が掻き消えていく。

バケツで撒かれた水の跳ねる音、水の蒸発する「ジジツ」、木材が焦げてはじける音が断続的に響く。

信也の声（ナレーション）

その夜。静岡駅の方角から、空が燃え始めていった。

夜空には、最初に白い傘がふわりと開いた。

音もなく、すうっと落ちてきた——それは、光の雨だった。

町のひとつひとつが、まるごと見えてしまうほど、白かった。

上空を切り裂くように、百発近くの白い光が降りつづけ、ずっと真昼のようだった。

やがて焼夷弾は、「ザーツ」という音と一緒に、火がばらまかれるように地面を走った。

照明弾の白い閃光が線を引きのように降り注ぎ、続いて焼夷弾と熱風が町をなぎ倒していった。

最初に火がついたのは、南安倍。

そこから、八幡、馬淵、呉服町……町が一つずつ、順番に火に飲み込まれていった。

まるで火が道を進みながら、こっちへ近づいてくるみたいだった。

僕らの町——駒形が燃えたのは、深夜十二時十五分ごろだったと思う。

そこから先は、時間なんてかからなかった。

あっという間に、すべてが赤く染まった。

人々は、誰もが走っていた。

鍋をかぶった人、畳を背負った人、泣きながら裸足で逃げていく人。

どこに逃げたって、安全な場所なんてなかった。

……それでも、走るしかなかった。

——あの夜、静岡の空は、本当に、真っ赤だった。

静岡そのものが、炎に溶けて消えた。

午前四時半過ぎ、朝を迎えるころには、見慣れた通りも、建物も、もう影も形もなかった。

——「花の湯」も……。

赤いフラッシュが舞台全体を包んだ後、暗転。



## 7 燃え跡に立つ―夜明けの誓い

一九四五年六月二十日、早朝4時半過ぎ。

舞台下手には、焼け跡の一角。

地面には灰と瓦の破片、黒く焦げた柱が数本残り、そこが町だった痕跡だけを残している。

舞台全体は夜明け前の灰色の光に包まれている。

かすかな風の音が吹き続ける。

信也と千代は、背中合わせに座っている。ふたりとも煤で汚れ、服は焦げ跡が残っている。

しばらく沈黙する二人。

千代　　ここ……どこなの……？（足元を見る）道、だったよね。ここ……電柱も、標識も……ぜんぶ……

：

信也　　俺たちの町、駒形だよ。きのうまで、家が並んてた……花の湯も……うちも……。

千代　　少し、明るくなってきた。

信也　　（うなづく）……空が、赤い。でも、朝焼けじゃないな。

千代　　（立ち上がり、遠くを見て）……向こう。駅の方、まだ煙がのぼってる……。

信也　　（別方向の遠くを見る）向こうに……海が見える……

千代　　（そちらを向き、目を細めて）……駿河湾……？

信也　　山が、消えたわけじゃない。屋根がないだけ。町がなくなった。

間。

千代 (呟くように) ……昨日まで、ここに、笑い声も話し声も……ちゃんどあつたのに……

信也 人のあと、しか残ってない……焼けて……顔も、名前も……わかんない……。

千代 ほんとうに、全部、消えちゃったんだ……。なんにも、なくなっちゃった。

沈黙。ふたり、夜明けの空に漂う煙を見上げる。

千代 空だけは、きれい……

信也 (小さく) ……それが、一番、くやしい。

静寂。遠くで、崩れ落ちる木材か瓦の音が響く。間。

信也

あのとき……千代姉が、俺の腕、ぎゅっとつかんでくれたじゃん。あれで、俺……助かったと思  
った。

千代

（驚いたように）……覚えてたの？

信也

（うなずく）あれがなきや、俺、立ち上がれなかった。

千代

（回想気味に）濡ちゃんを壕に入れてすぐだった。近くに焼夷弾が落ちて、火が舞い上がって、  
目が開けられないくらい熱くて……信也がしゃがみ込んで、動けなくなってる……私、怖くて  
たまらなかった。でも、気づいたら、信也の腕をつかんだ。……それだけ。でも、それで――  
走ってくれた。

### 短い間

信也

俺も、動けなかったんだ。

千代、ゆっくり信也の方を見る。

千代 ……あのとき、本当に怖かった。気がついたら、思わず信也の腕、掴んだの。(少し間) ……

どうして、あの時、あんなに落ち着いていられたの？

信也 (かすかに微笑む) 千代姉が震えてたから……俺、がんばらなきゃって思ったんだ。

千代 (俯き、息をのむ) ……参ったな。ずっと弟だと思ってたのに……頼られてばかりのつもり

だったのにさ。でも……あの時、火の中で、信也の腕だけが頼りだったんだって気づいた。……

火の中で、私を手をつかんだのは、助けてくれるって、思ったからなんだね。(ふっと笑い、顔

を上げて) ……なんかさ、もう……これからは、頼っても、いい？

信也 (少し驚いたあと、静かに) うん。……うん。いいよ、千代さん。

一呼吸。千代、遠くを見る。

千代

また、いつか、湯を焚ける日がきたらさ……そのときは……窯場の掃除させてね。（小さく笑

い）煤まみれで、煙くて、でも……ちゃんと生きてるって思えるのがいい。

信也

（ゆっくりうなづく）……うん。頼むよ。

ふたり、ゆっくり立ち上がり、朝の光に照らされる。静かな沈黙。照明がゆっくり朝焼けの暖色に。

千代

……行こう。濡ちゃんが待ってる。……信也が、絶対迎えに行くって、言ったんだから。

信也

（うなずいて）ああ……絶対、って言った。

ふたり立ち上がると、空の色が変わってくる。青みが抜け、東の空にほんのり橙が混じる。

上手にある壕の方へ、向かって歩き出す。

舞台には瓦礫。その向こうに太陽の光が差し始める。

光の先に「女湯」の木札の一部が顔をのぞかせ浮かび上がる。

風の音が次第に弱まり、穏やかな静けさとなっていく。

信也の声（ナレーション）

焼け跡に、朝が来た。母さんも、たきおばちゃんも、もう戻らなかった。けれど、千

代さんがいた。濡が待っている。

命の重みを、掴まれた腕で知った。

あの赤い夜、守れなかったものもあった。

それでも、これからは——守る側になりたい。

生き残った者として。語り継ぐ者として。

明かりが徐々に弱まっていき、木札のみが残る。

無音の中で木札だけが残像のように映る――

信也の声（ナレーション）　　焼がれきの中で、焼け焦げた「女湯」の木札を見つけた。

それだけが、すべてを焼き尽くした火のなかから、ぼつんと残されていた。

失われたものだけじゃなく、残されたもの、つながってゆくものがあると、初めて思えた。

木札の明かりが消え、暗転。

信也の声（ナレーション）　　あの夜から、いくつもの季節がめぐった。

焦げ跡に草が芽を出し、瓦礫のあいだから、小さな風が通り抜けていった。

呉服町も、七間町も、両替町も——あの夜、赤く染まった通りには、ふたたび人の声に戻っている。

あの日、必死に逃げた道を、今は子どもたちがランドセルを背負って駆けてゆく。

壊れた街には、今、カフェや商店の灯りがともり、駒形にも、また「花の湯」の白い暖簾が揺れている。

……あの日、焼けた記憶は、静岡の大地に、静かに息づいている。

声にしなれば、届かないまま、忘れられてしまう。忘れたいと願った人もいる。

けれど、「話したい」と思った者がいた。「聞きたい」と感じた者も、ここにいます。

空襲の夜を越えて、ふたたび息をする町で、残った想いが、少しずつ、言葉になっていく。

——ここに、語る人がある。駒形の空の下。

あの日を越えてきた者が、今、語る。

生き残った者として。語り継ぐ者として——。

## 8 風と灯―あの夜を越えて

ともしび

舞台は1場と同じ。夕方17時頃の柔らかな陽射し。

初夏の風がすこし涼しく吹く。「花の湯」の店先。

焼け跡のある「女湯」の木札と「花の湯記録帳」。

信もおじいさんと千代おばあさんの話を聴き終えた高校生3人が、外に佇んでいる。

少しの沈黙。

祐樹

……頭の中、まだ騒がしい。

沙羅

(木札に触れ) ……焦げた跡、ここに残ったままなんだ。

ひかり ……ここに立つと、昔がすぐ近くにあるように思えます。

3人、木札に目をやる。風鈴の音。

奥から、信もおじいさんと千代おばあさんが現れる。

信もおじいさん 夕方の風は、いいもんだ。

千代おばあさん ええ……よく聞いてくれて、ありがとうね。

ひかり あの……澪さんは、そのあと？

千代おばあさん ええ、無事だったのよ。防空壕で朝まで頑張つて、信也さんと迎えに行ったの。

祐樹 ……よかった。

信もおじいさん 戦後も元気だね。三人で暮らしを立て直すのに必死だった。

千代おばあさん 米も足りず、この銭湯を再び開けるまで、何度も諦めそうになったわ。

信也おじいさん　　それでも、安倍川へ魚を捕りに行った。濡は小さな網を握って、流れに負けそうになりながら

魚を追ってた。……あの姿は忘れられない。

沙羅

……あの約束を、本当に果たしたんですね。

千代おばあさん　　家族のために、役に立ちたいって思いが強かったのね。

信也おじいさん、タオルを差し出す。

信也おじいさん　　これを持っていきなさい。「花の湯」の名入りだ。

三人、戸惑う。

千代おばあさん　　——あの夜を越えてきた、この場所から。これからを生きる、あなたたちへ。

信也おじいさんと千代おばあさんは、微笑む。

祐樹

ありがとうございます。……今度は、ここに湯船に入りに来ます。

ひかり

ええ、ここに。

沙羅

私たちの、小さな約束です。

三人、深く頭を下げる。信也おじいさんと千代おばあさんが暖簾の前に並ぶ。静けさ。

信也の声（ナレーション）

忘れないことが、生きるということ。

語り継ぐことが、次の命に灯をともし。

——あの朝、焼け跡の静岡

遠くに駿河湾が青く光っていた。

その青さも、風の匂いも、あの日を知らない人たちが、

これからの言葉で語り続けていく。

夕映えが薄桃色から青へと移り、白い暖簾を残して、舞台全体が夜に包まれていく。

——  
暗転。

(完)

(参考文献) 書籍 『静岡空襲の記録』 静岡空襲を記録する会編